

【優秀賞】

愛を知らせるポツポちゃん

大家衣濃理（奈良県 奈良県立青翔中学校 3年生）

きつと、それが愛だと思う。

格段に寒い冬だった。夏ならまだ明るい時間なのに、外はすっかり暗くなっていた。同じ中学に通う双子の妹といつものように、田舎にそびえるマンションの一室に帰宅した。角部屋だけにある門扉を開けたとき、足が止まった。いつもと違うことが起きていた。我が家のドアの前に、リアルな山鳩の置き物があった。暗くてはつきりとは見えなかったので近づいてしっかり見た。羽毛がひらひらとゆれ、まばたきもした。

「生きてるやん！」

妹が驚いて大声を出した。私は、鳩が置き物ではなかったことに加えて、妹の大声に驚き、言葉がでなかった。しかし、当の鳩ときたら、

「ここは私の居場所ですが、何か？」

とでも言うように、産卵するときのポーズでどーんと座っている。妹は通学カバンからスマホをとり出し、記念撮影をするのだと、鳩に向かって

「はい、チーズ」

と声をかけている。そうしている間に少し驚きが引き、我が家に鳩がいるわけなどなく、もしかして階を間違え、ここはよそ様の家かもしれないという不安がよぎった。よそのお宅なら、インターホンを押してはいけない。仕方なく、スマホで電話した。

「お母さん、ドアの前に鳩が座っていて、中に入られへんねんけど。」と伝えると、母がすぐ玄関に来てくれて

「ポツポちゃん、ちよつとごめんね。」

と少しづつ少しずつドアを開けた。鳩は不機嫌そうにこちらを見ただ後、仕方なく足を立たせ、居座っていた場所を移動した。ようやく私たちは中に入れた。この非常事態にも関わらず、母の落ち着いた行動が不思議だった。しかもポツポちゃんという名前までつけている。今に始まったことでは無いが母の名付けには全くひねりがない。因みにペットのインコはピーコちゃん、クワガタはクワちゃんとかタちゃんである。それはさておき、ポツポちゃんは数時間前に母が仕事から帰宅したときには、すでにあの場所にいたという。家の中で、私達はポツポちゃんのことを気にして何度も何度も確かめに行った。母がしたように少しづつドアを開けてみたが、ポツポちゃんは場所も姿勢も変わっていなかった。

私達はこれから何をすべきか、ポツポちゃんに何が起きているのか、各々インターネットで調べていた。そのうち父が帰ってきた。

「誰や、ドアの外にこの紙を出したのは。」

父が持つて入ったのは、クレジットカード会社から届いていた利用明細だった。

「あ、ごめん。それ多分私やわ」

と母が言った。個人情報取り扱いに厳しい職場に勤めている母は、家でも徹底している。その母が個人情報満載の明細書を外に

放置するなんて、普段ならあり得ないことだ。

「ポッポちゃんのお腹が空いてたらあかんと思って、ピーコちゃんのエサをその辺にあった紙の上に置いていたんよ。」

と、母は言った。冷静に見えたが、実は母も気が動転していたのだとおかしくなった。父が帰宅したときにも、ポッポちゃんに変化はなく、「寒くて動けないんじゃないか。」と、父はアマゾンのダンボールの側面の一つをアーチ状に切り抜き、出入り可能な窓付きのポッポちゃんルームを作った、寒さから守る仕様のこの段ボールを上からぶせに行った父は、

「鳩って怒るとポーって鳴くんやなあ。今まで生きてきて初めて知った。」

と苦笑しながら言った。かぶせようとして怒られたから、しばらく様子を見ていたらポッポちゃんが自分から段ボールに入っていたらしい。とりあえず寒さと空腹からは守れたと安心し、私達は眠りについた。

翌朝、目覚めた私は、先に起きて私達のお弁当を作ってくれていた母に、おはようと言うのも忘れてたずねた。

「ポッポちゃんは？」

もういなかったという答えだった。自分の目で確かめて、ドアの外に出た。やっぱりポッポちゃんはいなかった。私はポッポちゃんが飛び立ったであろう空を見上げた。ポッポちゃんと関わった数時間がかげめぐる、笑いがこみ上げてきた。鳩にはいチーズと声を掛けた妹、安直な名前をつけた母、鳩に怒られた父、家の前にいるのに家に電話した私。おかしくて、こらえ切れなくてアハハと声を出して笑った。何てアホな人達なんだろう。でもそれぞれの優しさをポッポちゃんに注いでいた。このアホな人達のこと

とこれが愛だ、と思った。ポッポちゃんはそれを知らせてくれたんだ。まだ明けきらない空にポッポちゃんの幸せを祈った。